医事・文談　九百九十二

《正岡子規（36）の続き》その280

子規直系の系族と養嗣子

平岸　三八

律が居なければ一家の運転が止まり、どうにもならぬとし、律が病むよりは自分の死を望むとしながらも、時に殺そうとする程の気持となる。

それにしても、二度嫁して、二度離婚となるとは、兄の看病人となる運命だったとしか思われない。妹の不幸は、兄にとって、又一家にとってのしあわせだったとは何たる運命のいたずらであろう。

律は精神的不具者だとか、指さきの仕事は極めて不器用だと子規は書くが、書物の出納、原稿の浄書ができ、子規の没後、裁縫の教師をしたことからすれば、子規の考えは誤っているだろう。

律の二度の結婚と不縁のことは、年譜に次の如くにある。

明治18年（二五四五）　7月
　妹律、恒吉忠道と結婚。当時、律は16歳。
明治19年　5月
　律　離婚
明治22年　6月
　律　中堀貞五郎と結婚、律20歳。
明治23年　4月
　律　離婚

子規没後、律は明治35年12月27日正岡家の戸主となる。昭和16年5月24日没。72歳。

大正3年4月8日、加藤恒忠の三男忠三郎（明治35年5月18日生。母、樫村氏ひさ）、正岡家の養嗣子となる。昭和51年9月10日没。74歳。

子規の全集は、過去四回発行されている。鴎外、漱石よりは少ないが、四回というのは推重されている証である。

①アルス版　全15巻　子規全集
　大正13年6月～大正15年11月
②改造社版　全22巻　子規全集
　昭和4年12月～昭和6年11月
③改造社版　全5巻　正岡子規全集
　昭和6年11月～昭和9年2月
④講談社版　全25巻　子規全集
　昭和50年4月～昭和53年10月

そのほか現代日本文学の各種の全集や詩歌集中の分冊として正岡子規集がある。また、静岡県駿東郡長泉町KK増進会出版社発行の、「子規選集」全15巻（二〇〇二～二〇〇四）は子規の研究・評伝書として最も詳しいものである。

またまた山崎元修医師の著書を発見したので、ここに登載する。

今回のものも、子規周辺の人びと（二十一）に記した東京神田の秦川堂書店総合目録（平成19年度6月号に載るものである。同目録P161に次の書名が見られる。賣価は一〇，五〇〇円）。

産科要論　対行書房山崎元修纂著
　明20

今まで見られたところでは、山崎医師は明治9年東大医学部を卒業しているのだが、同14年には多数の解剖図を模写しているし、同28年には海水浴の指導書を出版している。またはっきりは分からないが、マルシャス・ウイルソンの「歴史哲学」を出版している。

さらに明治20年には、産科学の著書があることになる。明治初期の医師は、東大卒でも各科一般医を標榜していた医師がいることになる。

山崎医師は明治19年（一八八六）4月8日、本郷区真砂町二四番地に医術を開業した《このこともKK増進会出版の「子規選集」第14巻和田克司編『子規の一生』P118に載っていて、その出典は古賀ノート（松山市立子規記念博物館）によるとある》。

山崎医師が「歴史哲学」を出版したことは、同じく『子規の一生』のP159に載る。出典は、「法政大学図書館蔵　正岡子規文庫目録」によると。

子規が山崎医師の診を乞うた明治22年5月には、産科の著のある山崎は、産婦人科のほかの科の診療をもしていたのであろうか。喀血した子規は、内科専門医でなく、まず全科医にかかったのである。